

特集 子育て総合支援施設の役割を考える

—『ころころの森』3年間の成果と課題から—

東村山市から委託で、東村山市子育て総合支援施設「ころころの森」（2008年10月に開設）の運営にあたってきた白梅学園は、2012年3月末で運営主体から手を引き、指定管理者として新たに「東村山市子どもNPOユニット」が運営を担うこととなった。

この3年間で利用者は徐々に加え、1日平均200人前後の親子が利用するようになったが、保育園に行けない、行かない子どもたちとその親たちの居場所づくりと支援という狙いでスタートした「子育て総合支援施設」の役割は十分に果たせたのかどうか。この実践を通じて白梅の教育・研究にどう生かすことが出来

たのか。今後ますます大学にとって重要になってくる地域連携、地域貢献から見て、どんな教訓、課題を得られたのか。

市民への報告も兼ねて、2012年3月3日、東村山市サンベルネ・コンベンションホールで、シンポジウム「子育て総合支援施設の役割を考える——『ころころの森』3年間の成果と課題から」を以下のメンバーで開催した。

汐見稔幸（白梅学園大学学長・

ころころの森センター長）

石井知子（ころころの森施設長）

岡 健(多摩市立子育て総合センター「たまっこ」

スーパーバイザー・大妻女子大学教授)

今井和之(当時東村山市子ども家庭部長)

千葉瑞枝(NPOすずめ)

司会・山路憲夫(白梅学園大学教授)

開会

山路 休日にもかかわらずご足労いただきましてありがとうございます。「ころころの森」がオープンしまして、間もなく3年半を迎えることになりました。思い返せば、「ころころの森」の計画・立案からすると、5年近くが経過しました。

東村山市から、私も白梅学園大学に、都保健所撤退の後、子育て総合支援施設として活用する知恵を貸してくれないかという話を持ち込まれたのは2007年のことでした。以来、企画を作り運営まで任されるようになって3年半、このたび、学校法人白梅学園が今まで運営してきた「ころころの森」を2011年4月から、今まで「ころころの森」の運営に携わっていたいただいたNPOの方々の事業体により再スタートすることになりました。

その仕切り直しにあたって、「ころころの森」でやってきた3年間は何だったのかを振り返るご報告を、市

民、近隣の子育て支援にかかわるNPOや行政の方々にさせていただく機会を、本日、持つことになりました。申し遅れましたけれども、本日の司会進行を務めさせていただきまず白梅学園大学の山路です。よろしくお願いたします。

まず、最初に学校法人白梅学園理事長の小松から「ころころの森」を振り返ってあいさつをさせていただきます。

ごあいさつ

小松 皆さん、おはようございます。ただいまご紹介いただきました白梅学園の小松です。今日は、天気には、辛い恵まりましたが、まだちょっと寒そうな状態です。せっかくの週末で、のんびりできるところご出席いただきまして、本当にありがとうございます。

早いもので、「ころころの森」が始まってから3年半です。準備を入れると4〜5年ということですね。その



間、東村山市、NPO、そして、皆さんのような子育ての中の方、そして、市民の方から本当に多大なご支援、ご協力、ご指導をいただきました。心から御礼申し上げます。

今日は、その3年間の成果と課題を検証し、今後の夢、希望につないでいただけたら幸いです。私どもとしては、折に触れて、この活動のこと、成果のこと、課題のことを、白梅学園にある二つの機関誌に紹介してきました。最近も、今日登壇します石井施設長が、「地域と子ども学」という機関誌に報告を書いております。

そういう意味で、白梅学園としても可能な限り対応してきましたが、ただ、いい成果だけではなくて、いろいろ課題も残っていると思います。今日は、その辺も自由に発言、議論し、検証していただければありがたいです。

私のほうから二つほど提言させていただきたい。これからの議論の中で、あるいは今後、素材に使っていただければありがたいと思います。

申し上げたいことは2点あります。その一つは、この「ころころの森」では、子育てをする、集まった人と楽しむ、そういった、日々同じことを繰り返すだけではなくて、常にそういったものを超える視点、つまり、よりよいやり方、それも最上のものを追究する姿勢を持ってほしいということです。その上で、これから3年

あるいはそれ以上かけてでも、子育ての東村山モデル、東村山スタイルといったものをつくり上げ、全国に発信できたらありがたい。

このように全国から、「子育ての東村山」、あるいは「東村山の子育て」というような評価を得て、目標にされるようなモデルを、ぜひつくっていただきたいというのが、第1点です。

もう一つは、この「ころころの森」の活動を、子育て支援だけで完結するのではなくて、よりよいまちづくり、よりよい暮らしづくりの一環として位置付けてほしいということです。子育ては、それだけで完結するわけではなくて、子育てでもいいし、暮らし・まちもいいという評価を得ることを視野に置いていただきたい。

東村山に、この地域に誇れるまち、他に負けない暮らしをつくる、その柱あるいは一環に子育てはなるんだという目標で進んでいただけたらありがたい。総合的な視点、長期的な視点を持って臨んでほしいということです。

しかし、現場で実際にやる人は、そう簡単ではない、難しい課題だと思っています。それでも、私の希望として、ほかにない東村山モデルといったものをつくり上げて、この地によりよいまち・よりよい暮らしを積み上げていただきたい。それをみんなでやるんだということ、ここに集まった人を軸にして、今後、東村

山のまちづくり、そして子育てということを考えただけなら素晴らしいんじゃないかと思っています。

最後に、この3年間、ご指導、ご協力いただいた市、NPOの皆さん、そして、市民の皆さんに心から御礼申し上げます。また、併せて、今日登壇される先生方、汐見先生、司会の山路先生、あと、専門の方々に心から感謝を申し上げます。また、今日ご参加いただいている会場の皆さんにも心から感謝申し上げます。ありがとうございます。どうもありがとうございます。

山路 それでは、本日のシンポジウムを入ります前に「こころの森」センター長で、白梅学園大学の学長、汐見から、「こころの森3年間を振り返って」という基調報告をさせていただきます。

それを受けて、シンポジウムで、「子育て総合支援施設の役割を考える」とのテーマで、汐見学長、「こころの森」の石井知子施設長、多摩市の、子育て総合支援センター「たまっこ」のスーパーバイザー大妻女子大学の岡健先生、東村山市の子ども家庭部の今井和之部長、「NPOすずめ」の千葉瑞枝さんの5人の方々にシンポジストとして参加していただきます。このシンポジウムで、「こころの森」の検証を含めた地域の子育て支援、子育て総合支援施設等を考えていきたい。

できれば、最後に、会場に参加された皆さん方のは

うからご質問、ご意見をいただく時間も設けたいと考えています。よろしく願います。

それでは、「こころの森3年間を振り返って」ということで、「こころの森」のセンター長、白梅学園大学の学長汐見から基調報告をさせていただきます。

基調報告

汐見 皆さん、おはようございます。せっかくの土曜日だったんですが、ようこそおいでくださいました。何とか、実りのあるシンポジウムにと思っております。最初に、全体の話題提供のような話をさせていただきます。

い。

そもそも、この「こころの森」がどういういきさつで立ち上がったのか。全国に先駆けて、大学が運営の基本を受け持つということも、そんなにたくさんあるわけではありません。どうしてそういうかたちになったのか、もともと「こころ



ろの森」は、東京都の保健所の施設の跡地利用という
かたちで始まりました。市のほうから、ここを、市民の、
特に子育て家庭を応援するためのさまざまな機能を
持った施設にしたいという、その要望があるというこ
とで始まったのですが、具体的に、それをどういうか
たちで造っていくのかということについて、専門家が
いるだろうという白梅学園に、その中身作りを協力し
てもらえないかという要請がありました。

本学としては、大学の学生教育、大学の社会的使命
というのを考えたときに、本当に、その研究が、まち
づくりだとか、子育て支援にきちんと生かせるもの
になっているのか。実際に、大学というのは、社会的
にさまざまな大きな役割を果たせることを示す部分も
ありますので、これは、積極的に協力しようということ
で始まったわけであります。

いくつかの夢といいますか、理念が生まれました。
まだ実現していませんが、例えば、今の集いの広場の
ような広場事業といいますか、お母さんやお父さんが
子どもさんと一緒に来て、そこで、子育てをみんなと
わいわいやりながらやれる場を作る。家だと息苦しく
て行き詰まってしまいますが、こういう広い空間の中
だと、子どもは自由に遊べて、親同士はいろいろ知
合いになれる、そういうのが広場なんです。そうい
う場所を提供するだけではなく、例えば、アートとい

うものに注目して、子どもの表現活動というのをさま
ざまに促していく。子どもは、知的な世界ということで、
計算をするとか、文字だとかいうのは、大人に比べ
ればさまざまな課題があるんですが、自由な表現能力
という点で言えば、大人にないものを誰だって持つて
いる。

大人になるというのは、こっちの色とこっちの色が
きれいとか、それはあんまりシンメトリックじゃないと
か何とか、理屈でいろいろやっていく。しかし幼い子ど
もには、体全体でばつぱつと描いたときに、何でこん
なバランスよく描けるのかとか、何でこの色を使うん
だろうかと考えないでやっていくような世界がたくさ
んありまして、それはそれで、また、私たちをいろいろ
反省させてくれるような、貴重な世界なんです。

アートということに着目すると、子どもは未熟な存
在だとはとても言えない。その子どもたちのアートとい
うものに注目して、それも、表現活動を自由にでき
るような空間にしたい。その作品も、できたら、町に
いろいろ展示していくようなことをやっていく、そうい
う夢も、実はありました。

その中で、大学と市と市民、この三つが協働して運
営していく形態を模索しようということが大きなテー
マになりました。それから、広場というのは、単に場
所があればいいわけじゃなくて、どういう色合いと空

間にしたらいいのかとか、床はどういう素材がいいのかとか、イメージ、雰囲気といいますか、環境づくりというか、そこにはある種の専門性が必要なんだという事になって、専門家に協力してもらいながらやっていく事になりました。

その中の一つが、今言ったアートによる子育て支援。アートによる子育て支援というのは、結局、広場作りというのは、大きな意味で福祉的な事業なんです。アートの表現を豊かに導き出してということは教育的な事業になりますよね。つまり、概念で言いますと、福祉と教育を、小さな子どもの段階からできるだけ一体化させたような、そういう新しい施設を造りたい。

子どもの教育といいますと、家庭教育、それから幼稚園とか保育所がありますが、家で子どもを見ている専業主婦家庭への教育支援というのはいないんですね。そういうようなことも含めて、何とかできないか。そういうかたちでスタートいたしました。

実際に、私たちが最初にスタートするときに、こういうことを大事にしてやったか、どういうところでぶつかったか。実はたくさんあります。私などが一番大事にしたのは、とにかく人物探しです。子育て支援施策にとって、決定的に大きいのは支援者の力ですね。いくらいい施設を造っても、支援者が何かを取り違えていたりすると、あるいは、権威的になってしまったり

すると、一挙に、その施設はだめになる、行きづらい組織になっていきます。

いろんな経験もあって、評価が高かった石井施設長に来ていただきました。これはかなり大きかったと思います。石井さんといういろいろ相談しながら進めていくという態勢が取れたことは非常に大きかったです。そういう人物探しを最初に随分やりました。

それから、市と、大学と、市民の協働というふうに名前は出したんですが、一体、どういう関係で協力していくのがいいのかということについてモデルがあったわけではありません。従って、その辺で、最初はかなりごちゃごちゃいたしました。

いろんなことで、こうしてくれないか、ああしてくれないかとやりながら、だんだん落ち着いてきたのは、大学がお願いした人たちによる運営ですよね。そういうところに市が直接入ってくると、実は現場は動きにくくなります。要するに、「これは決めていないでしょう」とか、「これについては報告書はあるんですか」ということになってしまいうわけですね。そういうことは、やってみたいと分らないことが実際はある。

そういう意味で、かなりは実践している人に任せていただきたい。それに対して、いわゆる後方支援というんでしょうか、「それだったら、こういうものを、今度、取ってくるから」とか、「それについては、こういう報

告をちゃんとしておきますから」とか、あるいは、「市には、今、こういう要望があるんだけど、これを受け止めてもらえるかしら」とかというかたちで、いわば後方支援だとか、間接支援というかたち。

こういうかたちにならないと、お互いがやりにくいところがあるんです。それぞれの立場が違うからです。長くやっていれば、それでうまくいくことはあるかもしれないけども、少なくとも、「ころころ」は、当初、その関係をどう作るかということで、相当模索をいたしました。

分かりやすく言うと、市は、さまざまなかたちで後方支援をしていただくことが一番で、実際の自身についてはある程度任せてもらう。その代わり、任せた実践が、市民に本当にいいものになっているかどうかについては厳しくチェックをしていただく、これは絶対必要です。私たちは、市民アンケートを採るなり、いろんなかたちで、どういうふうに評価されているかということについては、ちゃんと自分たちで調べる。そして、それを、市に任せていただいたけれども、その結果はどうだということについては責任を取るということをやっていきました。

それから、市民と、今度は、白梅の共同ということ。これも、実際にはなかなか難しい。実際には、市の中にあるNPOに参加していただきました。でも、NP

Oには、それぞれNPOの活動があるわけですよね。それ以外に、「ころころ」運営にどう協力してもらえるのかということで、NPOの中でも、こういう子育て事業だとか、そういうことに強い関心があつて、そのノウハウもある、そういうグループに協力していただくのが一番いい。

ただし、役割分担をある程度決めておかないと、どこまでがNPOの仕事で、どこまでが白梅の仕事なのか、これがはつきりしないと、これが一番ややこしいとこですね。お互いが頑張つてしまいますとバツティングしてしまうところがありますし、お互いが遠慮し合うと抜けてしまうところがあります。そういう点で、NPOの方々にはこの部分を持つていただきたい、この部分をやつていただきたいというかたちで、きちんと分担する、これが大事だったと思います。

いろんな利用法だとか何とかを、いわば、間接的に運営委員会に持ち込んでくるというものの、かなり、NPOの大事な役割ですよ。それから、いろんなかたちで挑戦するとか、伝えていくことも、実際に非常に大事な役割ですけども、そういうかたちで協力しつつ、ある程度の分担をしておこうということが、うまくいく秘訣（ひけつ）だったような気がします。

それから、そんなに財政が豊かに法人にあるわけじゃない中で、しかも、もともと広場のために造られた施

設ではありません。保健所の跡地ですよね。それを、何とか広場として工夫し、来た人が、「ここはいいところね」と言ってくれるようになるには、やっぱり、場所づくりとか、環境づくりとか、これは決定的に大きいことが分かってきました。

そのために、かなり、専門家を動員しました。専門家を動員という点では、アートというか、本学の美術指導だとか、造形指導だとか、そういうことをやっておられる先生に協力していただいて、もっと、ここはこういうふうにやったらいい、床はこんなふうにやったらいいのではないか、真ん中の柱が何とも邪魔だったわけですよ。それで、そこをこういうふうに囲って柔らかい感じにしたら、そんなにお金もかからなくてすむとか。あれだけの施設を、たぶん、200〜300万円で全部やってしまっているんですが、画期的なことです。そういうことをいろいろお願いしました。

それから、手作りおもちゃにはこだわりました。既成のを買おうと、メーカーによってコンセプトが違うのがばーっと並んでしまうんですね。非常にごちゃごちゃしたイメージになってしまいます。ですから、できるだけ手作りで、淡いトーンでお願いしたのですが、その結果、布だとか柔らかいものが基調になってきます。それから、あまりけばけばしい色は使っていません。そういうものを丁寧配置しながら、それでも手作り

ができないものについては買うしかありません。それはど真ん中に置くんじゃなくて隅っこに置くだとか、そういう配慮をしながら、環境づくりというものに対して徹底的にこだわったというのが、最初の苦労でありました。それは、やっぱり、後で非常に生きてきたと思います。

くり返しますが、何らかのかたちで専門家の力を借りたことが大きいですね。これは、私たちにとって大事な教訓になったような気がいたしますが、そういうことをいろいろやりながらスタートいたしました。

実際にやり始めたあと、さまざまな模索をしながら、こういうことが大事なんだということをたくさん学んでまいりました。最初に申しましたけども、こういう子育て支援センターのようなどこで一番大事なのは、支援者、いわば人物ですね。石井施設長というのは既に港区にある「あい・ポート」という先駆的な子育て支援センターの副施設長をやっておられた経験者なんです。が、もともと保育者でもあります。

ところが、保育の仕事と、子育て支援の仕事というのはかなり違うんですね。ベクトルが逆を向いていることもある。保育者として優秀な人が、支援者として優秀であるとは限らない。

保育者というのは、子どもをどう育てていくのかということに対して強い関心を持っていますし、親御さ

んを見たときに、もつとこうしてあげたほうがいいの
にというときにアドバイスすることもやらなきゃいけ
ない。でも「つどいの広場」のようなところで、「お母
さん、もつとこうしてあげたほうがいいよ」とかやって
しまうと、「子どもとリラックスしようとして来たのに、
がみがみ言われるのよね」というふうになって、二度
と来なくなってしまう。だからといって、ちょっと
心配な子育てをやっているお母さんを見たときに、
放っておけばいいのよというわけでもないんですね。

その辺の距離の取り方は大変難しい。見ていただい
たら分かりますけども、広場の支援者たちをどの辺に
配置して、どの辺に座って、どういうふうにして様子
を見ているということが、実は専門性なんです。支援
者だけで密になり過ぎますと、そこは、みんな近づき
ませんよね。ばらばらになってしまおうと見えない人が
出てきますね。必ずみんなを見ているんですね。見て
いながら、あのお母さん、ちょっと心配だねといったと
きには、後で相談をしていくわけです。

そういうときのかかわり方というのは、周りから見
たら柔らかなければいけないわけです。その人が肩
ひじ張っていて、「うん、何かないかな」と見ていたら、
みんなが近づいていきません。支援者の専門性という
のは、従来にない、学問的にも体系化されていないよ
うなもので、だんだん分かってまいりました。

受付に来たときにどういう対応をするのか、そのと
きの言葉の掛け方、こちらの表情、姿勢、それによって、
「ああ、ここ、何だかいいところね」と感じてもらえるのか、
「何か、堅そうね」とか、「うるさそうね」とか、利用
者の印象が変わります。ですから、そういうところの
受付の仕方とか、そのときの姿勢、しぐさ、そういう
ところについてもかなり配慮していただきました。と
いうか、そのようなことが、決定的に大事だといふこ
とが、やっていて分かってきたことです。

それから、見えないところで、例えば、皆さんが帰っ
た後何をしているかというと、丁寧な掃除をしている
のです。ここで病気が広がったということになったら、
もう一発でおしまいです。ですから、終わった後に丁
寧に掃除をしたり、拭いたりということをやっている。
そういう、見えない仕事に極めて大事だということも、
だんだん分かってまいりました。ごみとか、そういう
のについても、「あそこに行ったらごみが落ちているん
だよね」といわれたら、もうおしまいです。そういう
ことを丁寧にするという自覚と専門性が、やっぱり必
要なんです。

それから、こういう施設はすべてそうなんです、「家
庭で子育てしているよりか、あそこのほうが絶対いい
よね」というように、何らかの意味で家庭よりもワン
ランク上でなければ、なかなか来ないです。来るとい

うときは、必ず来るだけのメリットがあるようにしておかなきゃいけないわけですよ。もちろん、「家の中にいると息苦しいけど、ここへ来るとほっとするよね」という事は基本ですが、それにプラスチックアルファがある。

その一つは玩具なんです。子どもを育てていくには、親のかかわり方だけではなくて、子どもがどういう物の世界と出会っていくのかということも大事なんです。どちらかというと、ヨーロッパなんかのほうが玩具研究は熱心です。ヨーロッパのいろんな都市に行けば、その町の駅前だとか、そういうところに必ずおもちゃ屋さんがあるんですが、そのおもちゃ屋さんの中身は日本と随分違いますよ。

日本は、大きなメーカーが、大量に、できるだけ安く作ろうとするため、プラスチック系だとか、そういうものがすごく多いんですが、なるべくそういうのじゃなくて、手作りに近いもの、木のおもちゃとかのほうがいい感じが柔らかいですね。持ったときの感じも温かいですよ。できるだけ手作りで、柔らかい感じの、子どもが最初に出会う世界ですから、触ってみたらいい感触だったとか、面白い形になってくれたものと出会って、物に興味を持って、積み上げてみたり、投げてみたりするわけです。

どの子どもたちも自由に遊べるために、何か定番のおもちゃを置いておけばいいということにはならないんで

すね。今回は、白梅保育園の園長先生はじめ、教育の経験のある先生に来てもらって、それから、白梅のアートを専攻しているような学生に来てもらって、たくさんの手作りおもちゃを作ってもらいました。あれはあれで大事な財産になっていますから、これからも、ぜひ、それはつないでいてほしい。そういうかたちで、おもちゃ作りというのは、実は、かなり大事なんだということを学んだような気がいたします。

その他、ブラインドをどうするかとか、カーテンをどうするかというときに、柔らかく、暖かい雰囲気はどう作るのかということにも、ずっと苦心してきたような感じがいたします。そういうことを、メンバーは一生懸命、工夫してやってくれました。

それから、支援者の研修をかなり大事にしてきました。これは、今の「ころころの森」のスタッフの研修もそうですし、それから、せっかくそういう場があるわけですから、こういうことに少しかかわってみたいという人に対する研修もやってみました。いろんなたちで、支援とは何かということを学ぶチャンスをとくさん作ってきたこと、これも大事なことであったように思います。

もう1回繰り返すことになりましたけれども、行政と市民と大学が協力する態勢というのは、うまくやれば、非常にスムーズにいくということで、一つのモデルにな

り得ることがよく分かりました。ただ、その協力関係については、さまざまなパターンがあり得ると思いますね。今回ののは一つの例です。

私たち大学がお手伝いするということは、大学の専門性を生かす点で大変大事なんです、いつまでも、大学が運営している形態が一番望ましいとは考えてこなかったんです、初めから。なぜかというところ、「ころころ」は東村山市民のもので。ですから、できるだけ市民の中から、運営もやれるような人たちが育ってきて、そして、市民の、いわば総意として運営していくかたちを採ってほしい。

大学は、それに対してさまざまなかたちで協力していく、側面援助をしていく。ですから、市民が運営主体になりながら、側面援助をするのが大学と市であるというかたちですね。お互いに違つかちで、内容的なところは大学がする、そして、財政の確保では市が協力していくというような、そういうかたちの三者の協働形態があり得るんじゃないか。むしろ、そちらのほうが、長い目で見たらいいんではないかということかたちで、現在は、そういう方向に移行していこうということになっていますが、とにかく、三者が協働していくことは、あるかたちで、一つのモデルになることは分かりました。

それから、2番目には、こういう施設で一番大事な

ことは、支援者の支援の姿勢であり、考え方であり、能力であり、そのために人物を選ばなきゃいけない、きちんとした研修を丁寧に取り組んでいくこと、これが大事だということ。です。

それから、3番目には、ものすごい数の人が登録して、もう1万人になる。でも、毎日は、百何十人ぐらいしかいらつしやらないわけですね。その中でお母さんとお子どさんの関係が心配ですよとか、お母さん自身がちよくちよく聞いてこられるとか、そういうときに、やっぱりあのお母さん、丁寧に対応してあげたほうがいいよとか、あのままでは心配だよねというケースをきっちりつかんでいくことが、実は大変大事な仕事になります。

そのときに、そういうちよつと心配な人を、誰がフォローしていくかといったときに、ある種の専門性が必要になってきます。今回、「ころころ」の場合は、大学の小児科のお医者さん、精神科のお医者さんにもかかわっていただきまして、月に1回、専門的な子育て相談にに応じていただけていました。

そういうかたちで大きく網を掛けながら、ものすごく丁寧な、細かくつかんでいくことが、実は、こういう支援センターなんかでは大事だということ、これも、教訓として学んだような気がいたします。

それから、もう一つは、長く続けていくためには、折々

に、その時々総括をきちっとやっていくこと、これが、やっぱり質を保つためには大事だということも教訓になったような気がいたします。総括はさまざまなかたちで行います、中間総括ですね。きちんと数をつかんでいて、どの地域からどのぐらい来ているかとか、そういうことでデータをきちっと出すこととか、それから、事例の相談です。あのお母さん、ちょっと心配なんだけどもということをきちっとやっていく、そのときの対応の仕方ですね。

今回、石井施設長はその辺は随分頑張ってください、私たちのほうの対応の仕方にも問題があることはあるわけですが、そういうときに、そういうことをあいまいにせずに、何とか自覚してもらうということをしきつちりやってきた。こちらの対応に心配があるときに、それを、どういうかたちで問題にするかというのは難しいところがありますけど、これをあいまいにしていると、必ず弊害は出てきます。ですから、そういうことについては、施設長を中心に、丁寧に、総括会議の中でやっていくことが、実は大事だということがあります。

結局、ああいう施設にとって一番大事なのは、雰囲気づくり、環境づくりということですね。これについて、専門家の協力も必要なんだということが、大事な大事な教訓であると、私は思っています。

課題は、実は、まだまだたくさんある。これは、ぜひ、皆さん方に、これから考えていっていただきたいということですが、何点か申し上げます。

当初はそうは想定していなかったんですが、実際に来ておられるお子さんは、圧倒的に0～2歳です。実は、3歳、4歳のお子さんも時々来んですが、3歳になったら幼稚園に実際には行って、昼間は午前中を中心に家にいないですから、そんなに来ることはないんです。ただ、今のあの施設では、4歳、5歳の子が来れると、0、1、2歳の子がたくさんいて、4歳、5歳の子どもと共存することは大変難しいです。

なぜかという、4歳、5歳の子どもたちは動きたいわけですよ。例えば、縄飛びをしてみたいとか、ダイナミックに遊びたいということが、当然、出てきますね。2人、3人ではかわって遊ぶようになりますと、あそこで、ちっちゃな子どもたちがハイハイしたり何かしているところで、横でわーっとなっちゃったら、これはもう、両立しません。

そういう意味で、今、0～2歳が中心になってきたというのは、あそこは4～5歳の子は遊びづらいよということとは、親にも伝わっているんだと思います。別に0～2歳に限定しますとは書いていないんですけども、そういうかたちになっています。それはそれで結構なんですけども、3歳とか4歳で、活発になつてき

た子どもたちの、いわば遊び場を、どう提供していくのかということについては、新たに挑まなければいけない。これは、課題として残っているような感じがいたします。

それから、あそこは園庭がないんですね。芝生を敷いたような空間がない。それから、すべて部屋の中になっていきますね。これはこれで仕方がないんですけども、子どもたちは、晴れたときには柔らかい日差しの中で、親子でゆつくりと遊ぶ、楽しむとかという、そういうことも、実は、やれば、全く違う展開がいろいろと期待できるんですが、現在のところ、それもありません。

基本的には、雨の日に部屋の中で遊ぶというのは当然なんですけども、晴れの日もすべて部屋の中だけになっていること、これを、できたら、少し課題にしておくことも大事だと思っています。これは、将来的に、東村山でまた似たような施設を造っていくとしたら、その辺のことを考えてやっていただきたいということがあります。

それから、ああいう広場はすべてそうなんですが、「あそこに来たときにはほっとするよね」とか、「ペちゃくちゃしゃべって、少し、ストレスが解消するよね」とか、「子どもも、すごく活発に遊べるから、すかっとしていいよね」ということは、これはいいんです。だけでも、

本来、子育て支援というのは、そこに来たときだけは支援された感じになるけど、家へ帰ったらまたおんなじだとなっちゃうと、支援の目的は半分しか達成されていないことになりますね。

支援というのは、親が、親としての自覚を高めたり、親としての振る舞い方などさまざまに学び、親として成長していくことを支援するわけですね。ですから、そういうためには、まだまだやることはたくさんある。例えば、おもちゃを一生懸命作りましたけども、家に帰ったらこのおもちゃがあるといひよねというものを貸し出しているわけじゃありません。できたら、「ころの森」のおもちゃ図書館みたいなのがあって、いいおもちゃが、3日ぐらいを限度に借りられるわよとか、そういうようなことができれば、もつと家の中でも似たようなことをさせることはできますね。

それから、子どもがもう少し大きくなってくると、親が子どもにやってあげることの一つ、大きなテーマで、絵本等の読み語りがあるわけですね。これは、子どもたちが想像力を高めたり、知的な世界へ入っていく、その媒介として非常に大事なんですけど、じゃあ、どういう絵本がいいかとか、読み聞かせはどういうふうにやってやったらいいんだろうというような、そういうことがでるような空間が、あそこにあるわけでも、また、ないんですね。

絵本図書館、おもちゃ図書館つてありますよね。そういうものができて、そこで、親が子どもに読み語って、それは借りていつてもいいですよっていう、そういうことをやると、あの施設の2倍ぐらい必要になってくるかもしれないが、そういうところがないと、家に帰って、あそこで学んだことを生かしていくことが、継続してやっていけるという関係になかなかならないですね。あそこに行っているときはいいけど、家に帰ったら元と同じだというだけではもったいない。そういうことができるようなこと、配慮していくことも大きなテーマになっています。

それから、かなり行事を入れてきて、これも教訓なんですけど、広場だけではなくて、時々はずてきな音楽会を開くとか、みんなで、少しわーつと騒げるような行事をするとか、そういう行事を折に触れて入れていくことはすごく大事だと学んだんですけども、そのことを通じて、そこへ来たときは楽しめるというだけじゃなくて、新たな親同士のつながりを作っていくことも大事なんです。

子育てにとって一番いけないのは孤立感とか孤独感なんですよ。何かあったときに、ちょっとしたことでも電話できるとか、「今からいつてもいい？」と言えるような人が近所にいることが大変救いになってくる。そういう友達作りのきっかけが、あそこでできたこと

が大事なんです。ですから、意識的に親同士をつなげていくような、「つながりなさい」と言ってもしょうがないわけで、何か、親と一緒に楽しむ中で友達が発見していけるような機会が大事で、そのためには行事は大事なんです。そういうことを、もう少し工夫していかなきゃいけないことも、テーマとして見えてきます。

それから、4番目に、あそこは、東村山駅から歩いて5分ぐらいの非常に近いところにあるんですが、東村山市全体にとってみたら、あの近所の人はいいわよねということになります。そういう意味では、できた支所を作りたいねということをずっと言ってきました。ただ、今の常勤スタッフと非常勤スタッフで、どこかを支所にしてやることはなかなかできないんですが、ああいうことを、似たようなかたちでやりたいというNPOが出てきて「どこそこころの森」というようなかたちで、あちこちにそういうのが出てくるような、あそこまでいなくても、似たような体験はできるかたちに発展させていきたい。

そういう意味で、拠点は一つあって、サテライトのようなかたちで、衛星のようなかたちであちこちにあるというような、そういうのが望ましいですね。そういうのも、これからの課題にしていきたいというのが、4番目になります。

それから、5番目に、初めに申し上げましたけども、もともとは、例えば、キーワードとしてアートというのがあったんですね。子どもたちの表現活動について、あそこいろいろな体験ができて、できた作品なんかも、町の中に、あちこちに展示していったりするかたちで、この東村山は、子どもというものを、本当に大事にしている町なんだという、そういうことを目指してきたわけですよ。

私は、この3月20日からイタリアのレッジョ・エミリアというところに、大学スタッフたちとも一緒に行ってきます。レッジョ・エミリアというのは、世界で最も有名な幼児教育の町です。その予算の十何%、市の予算の十数%が幼児教育に使われているという、そういう町なんです。東村山市の予算の十何%を幼児教育に使うとなったら、東村山は破産します。

一年に一回町の中に、幼児たちが作った素晴らしい作品が、町の一つの風景になるように飾られている。あちこちに、大きな、子どものインスタレーションみたいな、子どもの作品のインスタレーションみたいなのができるところなんです。それほどみんなが応援しているんです。

「こころの森」を、市民が、小さな子どもを育てている市民だけじゃなくて、東村山市民あるいは周囲の市民が、「子育てをしている親たちをみんなで応援しな

きゃいけないよね。そして、それは、次の時代を担う子どもたちを応援することなんだよね。子どもたちの可能性ってすごいよね。子どもたち、頑張りなさい」と言うような、そういう町にしていきたいためには、例えば、そうやって、「あそこに来ている子どもたちが、こんな作品を作っているんだよね」と、そういう形に発展していかなきゃいけないわけですよ。

そういう意味で、「こころの森」の、大きな特色というのをどう打ち出していくかということを、次のテーマに挑んでいく必要がある。それは、大きな意味で、東村山のまちづくりの一貫として築いていくべきじゃないかと思うんですね。

だけど、理事長のお話にあったように、「あそこだけはいいいね。でも、向こうへ行く途中は、子どもにとっては、ちょっと行きづらいよね」とか、そういう町であつたら、本当に子どもに優しい町にはならないと思うんですね。ああいうところが拠点となって、いわば、町全体が子どもに、とにかく優しいし、子どもを応援しているよねというような、そういう町になっていく一つの拠点になっていく。

そういうかたちで、次に挑んでいかなきゃいけないテーマはたくさんあるんだということを、私たちのお願いも兼ねて提案しておきたいと思います。以上です。どうも失礼いたしました。

シンポジウム

山路 シンポジウムに入ります。まず、シンポジストの紹介をさせていただきます。

(順に自己紹介)

それでは、まず、「こころの森」を一貫して先頭に立ってやってくださった石井施設長から、「こころの森」の3年あまりの運営を振り返っての成果と課題というところで話をいただきます。

石井 「こころの森」の施設長をしています石井知子と申します。よろしくお願いたします。平成19年の9月、都保健所2階フロアの活用に関する懇談会が設置され、平成20年の3月まで8回開催されて、事業内容、フロア改修、運営について、検討が行われてきました。

平成20年の4月から、子育て総合支援センターの準備室が、東村山市の市役所の中に設置され、そこで職員2名と、東村山市の担当職員合わせて4名で、半年間準備期間が設けられました。それは、共同運営をするNPO団体と、白梅学園と、東村山市、その三者で、毎週拡大事務局会議を開きながら、購入品や事業内容の具体化について検討を行ってきました。そういうことに基きながら、いろんな物をそろえていった経過

があります。

そして、センターの愛称については、市民に公募して、「こころの森」という名前が決定されました。

そして、平成20年10月にスタートするんですが、この中で、年3回行われる運営委員会は、行政と大学と市民の三者が、センターの現状を把握しながら、それぞれの立場からセンターのよりよい運営について話し合ってきました。そして、21年度より、市民のニーズに沿った円滑な運営を行う目的で、学識経験者、市内



の団体、利用者などから構成される運営協議会を設置、年に2回行われています。いろいろな立場の人が、センターの在り方について協議をしながら、一つ一つ積み上げながら、子育て総合支援センター「こころの森」がかたち作られ

いろいろな人たちの協力のおかげで、市民の方から大変高い評価をいただきまして、そして、たくさんの方が来てくれるようになりました。現在は、大体1日200人平均が来ているようなかたちになっております。年間利用者数というのは、21年度は4万846人、22年度は4万6908人、そして、23年度2月末現在ですが、4万5771人の多くの方が利用してきていただいております。

年齢別の利用者数は、利用者の90%以上が0歳から2歳とその親ということで、ここの施設そのものが、主に0から2歳までの乳幼児とその保護者を対象にした子育て支援施設ということで開所当初の目的はあったので、そういう意味では十分に達成されている現状だと思っています。

これまで、子どもが小さいと、公園とか児童館とかで遊ぶにはちよつと遊びづらかつたけれど、親子の居場所ができた。「ころころの森」ができてよかったとたくさんのお母さんやお父さんたちの声を聞いております。

次に、活動内容の柱として、一つ目に、子育てしやすいまちづくり推進事業と位置付けたものと、それから、二つ目に、子育て広場事業という、二つの大きな事業を進めてまいりました。

一つは「ころころの森だより」2月号の1面、「ほっとする汐見先生の子育ての話」というところにお便りがあるので、ぜひご覧下さい。

月に1回開催しています。そして、子育てについての悩みや気になることを、気軽に、何でも聞ける場になっていきます。1月も、100人ぐらいの方が参加しました。一方的に先生の講演を聴くのではなくて、お母さんたちの質問に先生が応えていくやり方です。います。広場で子どもを遊ばせながら、気軽に、気負わず聞けるので好評です。子どもの今の現状と向き合っているのと、つい、神経質になりがちですが、汐見先生の言葉には、これから先、長い人生の中では一時的なことだから、見守っていければいいよといった、親の気持ちを楽にさせるマジックがあります。

そして、そうなんだと納得できれば、お母さんのいらいらも少し治まって、子どもにゆとりを持って接することができるようになっているようです。そして、また、ほかのお母さんの悩みを聞いて、みんな同じような悩みを持っていると知ると、お母さんたちというのとは、ほかのお母さんはとても上手に子育てをしていると思っているんですね。だけど、そういう場で聞いたときに、すぐくほつとして、子どもによって悩みもいろ

いろいろだということも分かったりもします。そして、それらを、また、見守っていければいいということに気が付かれます。

本を読んだり、情報や知識をもらうのではなくて、その場に行って、共有して、感じてもらうことはとても大事なんだなという、この、毎月やっている子育ての話の状況を見ながら感じています。

次に、ダンボールの滑り台があるんですが、これは、「パパと遊ぼう」という事業名で、白梅学園の花原先生の指導で、毎年1個ずつ、このダンボールの滑り台を作っていますが、子どもたちも大変喜んで滑ってもらっている滑り台です。お父さんというのは、なかなか、お母さんたちのようにお話が上手でなく、子育ての話をするのは苦手なんです。作業しながら、お父さん同士が仲良くなってきました。今日見学に来られる方、ぜひ見てみてください。

それから、これが、10番目の「利用者参画共同行事」という事業名になっているんですが、利用者が主体になってやっていく、これは、お母さんたちが七夕会の準備をしているところです。お母さんたちが中心になり、スタッフが黒子になってやっています。このことによつて、お母さんたちがとても輝いていくなというところでは、やっぱり、お母さんたちが中心になっていくプログラムのよさを感じています。

そして、これは、生の音楽を聴いてもらうというところでやっている、七夕祭りのときのミニコンサートみたいな、ホルンの上手なお母さん、ピアノの上手なお母さん、それから、ソプラノでとても上手に歌えるお母さんで、ミニコンサートができています。

人材育成事業も、10個、ここに書いてありますが、人材育成についてはいろいろやっております。白梅学園の先生方を講師に招いたり、外部からも招いてやっておりますが、内部だけの研修じゃなくて、東村山市の職員研修とか、市内の保育園・幼稚園や、子育て支援施設に向けての講座をいろいろやっています。

これは、年6回やっております、その中で、利用者さんの中でも参加されまして、そこで力を付けて、実際の仕事に結び付けていくお母さんたちもいらっしゃっています。

次の「ジュニアサポーター養成講座」は、東村山市内の小学校5年生・6年生、それから、中学生を対象に、毎年夏休み4回講座で行っています。今年も、25名の子どもたちが講座を受けています。

そして、その中では、東村山市の助産師さんに来ていただいて、命の誕生、命の大切さ、そういうものを学んでもらったり、白梅学園の先生に、赤ちゃんの発達と遊びの講座とかをしていただいたり、広場で実際に実践してもらうなど、そういうプログラムに4回

出席すると、いつでも「ころころの森」にボランティアで来てもらえるという、そういうプログラムです。終わった後も、土曜日とかに、小学生・中学生がボランティアに来てくれています。

次が、地域連携事業と申しまして、12の事業を行っています。例えば、折り紙を教えてください。シニアの方は、ひと月に1回ずつ、広場の片隅に、こういうふうに、ゆったりと居てください。自分におばあさんとかがそばにいないとしても、皆さんとてもそれを楽しんでくださって、当てにして、この折り紙の時間を楽しみに来てくれて、毎月毎月続いてやっております。ボランティアさん自身も、すごく若い人からエネルギーをもらうというので、喜んで来てくれています。

8番目の「遊び多世代交流、私が大好きだった遊び大集合」、これも、開設当時からずっと、下のボランティアセンターの方の力を借りながら開催しているプログラムなんです。が、「ころころの森だより」の3月号の報告3に、「私が大好きだった遊び大集合」という報告の文章があります。2月の16、17日にやって、たくさんの方が参加してくれたんですが、折り紙とか、メッセージカードとか、かごめの手まり作りとか、こま回しとか、割りばし鉄砲とか、そういうものを、ボランティアさんたちが来て教えてくれたり、あと、広場では、伝統

芸能の足踊りとか、そういうのを見せてもらったり、あと、読み聞かせとか、鉄ごまの披露が行われたり、いろんな、そういう楽しいイベントを毎年やっております。

今年は、福島応援企画として、着られなくなった子どもも服や、使わなくなったおもちゃや絵本などの支援物資を集めまして、集まった支援物資は、社会福祉協議会のボランティアセンターを通じて、福島県のいわき市の仮設住宅に、手作りメッセーじとともに送られて、大変喜ばれたということです。これも、「私が大好きだった遊び大集合」の中で取り組んだものです。

東村山市はすごく広いので、月1回ずつ、こういうかたちで、「ころころの森」からスタッフとおもちゃを持って、公民館とか、触れ合いセンターとかをお借りしまして、毎月1回、こちらから出向いていく事業をやっております。秋津、多摩湖、富士見町の3カ所です。やりまして、今年2年目になりました。毎月1回なんです。が、行くのをすごく待っています。

それから、子育て広場なんです。が、広場の中で、「赤ちゃんタイム」という0歳児向け位の広場も、やっています。ここでたくさんのお母さんと出合いの場を設けまして、ここでお友達作りをしてもらうという、そういうことでやっています。「ラッタッタタイム」という、

1歳、2歳の子どもたちが、親子で遊ぶ、体を動かして遊ぶ、そんなプログラムもやっています。

それから、年1回、ママの音楽を聴いてもらうというところで、この年は明治学院の高校生たちに来てもらって、演奏会を聞きました。

この写真が、「ころころの森」のライブの様子です。これが、先ほども申しましたシンボルツリー。真ん中に、アクセントになって、ツリーがあることで、広い空間がとても安定した空間に生き返っています。これが、赤ちゃん優先コーナーの「ひよこのコーナー」です。たくさんのお母さんたちが集まっています。これは、「おままごとコーナー」です。ここも人気の場所です。いつもにぎわっている場所です。それから、これが「乗り物コーナー」で、牛乳パックで作った電車とか、木の汽車とか、そういうもので、ここの空間では遊んでいます。

一番奥に「くじらの部屋」という大きな多目的室があるんですが、ここでは、講座をやったり、いろんなかたちでプログラムをやったりするお部屋です。使っていないときは、子どもたちが体をいっぱい使って遊べるように解放しています。体を自由に使って、大きく使って遊べる、そういう部屋になっています。

以上が、こんな感じで事業をやっているという報告です。

「ころころの森」の利用者には、大変明るくて、広くて、

暖かい雰囲気喜ばれているんですが、大きな広場のスペースが、ただの屋内の公園にならないようにするにはどうしたらよいかを、いつも考えてきました。いつも清潔で、掃除の行き届いている施設であるというところでは、ほんとに、4年間たつても、全然、できた当時と変わらないとよく褒められます。

おもちゃの整備をしたり、安全面についても配慮を欠かさないということは、朝夕、職員がお掃除をし、おもちゃの消毒をし、とても丁寧に環境を作っているからだと思います。子育てしやすい、みんなが暮らしやすい地域づくりのために、「ころころの森」でたくさんの方の心と出会い、仲間を広げる場として存在してきたのだろうかということを、いつも問い掛けながらやってきました。

そして、課題としては、ここに来館できない人への支援について、今後、地域の子育てサポート力の輪を広げることも視野にした取り組みをしたいと考えております。

それから、父親の子育てを応援する事業というところでは、いっぱい来てくれるお父さんたちに、これからどういう講座を開催したり、どういう工夫をしていくのが課題になっています。土曜日は、多い日は、40人を超すお父さんたちが来ています。育児参加を楽しめるきっかけの場になるように、そういうかたち

にどうしたらしていけるのかは、これから、もっともつとを考えていかなければいけないと思います。

そして、子育て総合支援施設の役割として、保育園に行けない、行かない子どもたちとその親たちの居場所づくりに、役割を果たすことができたのか。「ころころの森」があつたから子育てができました、「ころころの森」があつてよかった、困ったこととか心配なことがあると、電話で相談をしてくれる家族もありますが、そういうような、本当に暖かい、心休まる場所として当てにされるように、成長していきたいと思っています。以上です。

山路 石井さん、ありがとうございます。この3年半、施設長として、本当にご苦労さまでした。それでは「ころころの森」のいわばスポンサーとして支えてくださった、東村山市の子ども家庭部長の今井部長から、市から見た「ころころの森」設立の目的の狙い、それが具体的にどうだったのかということも含めてお話しただきたい。

今井 行政からのご報告をさせていただきます。

その前に、東村山市について、初めての方もいらっしゃるので、東村山の子育てってどんなイメージなのかなどということをお話させていただきます。多摩地域の

中でも待機児、要するに保育園に入れない子どもが非常に多いんですね。10年以上、残念ながら、待機児が、東村山の行政の中から、なかなか減らない。特に、最近、保育園を造つても待機児が増える状況で、23年度4月、新カウントで222名という数であります。平成21年から市長は「子育てするなら東村山」というキャンペーンをしています。

待機児増と合わせて子育てへの市民の関心も高く、東村山の子育てについて、いろいろ議論をする場があります。「児童育成計画推進部会」という福祉計画の一端を占める部会なんですけど、そこでいろいろな議論をしていただいて、いろいろ提言をいただいております。これは、決定機関ではなくて、あくまでも、ご意見をいただくという機関でありまして、いろんな面で、ご意見を、今までちようだいしていました。「ころころの森」についても、そういうところの機関のご意見をいろいろいただいております。これは、後ほど出てくると思います。

私は、平成17年から19年度まで、財政課長をさせていただきました。実は、このころというのは、一番、どこもそうなんですけれども、財政的に厳しくなりまして、東村山も平成18年から20年度まで、新しい事業は始めにくい時でした。

細かいことは飛ばしますけれども、たまたま、平成

16年に閉鎖されました旧東村山保健所の利用の話が持ち上がりました。今の「ころころの森」は2階にあるんですけども、1階のフロアが、社会福祉協議会のフロアです。社会福祉協議会が近くにあったんですが、その部分も一緒に絡めて、福祉で使うならば、東京都は安く旧の保健所を譲りますよという話がありました。

ですから、この話があったのが平成17年から18年ぐらいにかけてなんですけれど、財政が非常に厳しい中ですが、喧々諤々の議論を、理事者を含めてさせていただきました。

結局、東京都からは、福祉に使うならばお譲りしますよということで、総額で4億3,500万円、これは土地と建物を含めてですけれども、購入させていただきました。これが、平成19年の7月です。

時間の関係上、細かいところのご報告はできませんが、その間に白梅学園大学さんに、この保健所の2階の利用について、調査・研究ということでご提言をいただきました。そういうようなことがございまして、実際に、フロアを使うためにはどうしたらいいのかわかろうになつていったわけです。実際に、白梅さんからご提言をいただいたのが、平成19年の3月だったと思いますけれども、その後、同じ平成19年の9月に、約半年間かけて、活用に関する懇談会というチームを

作りまして、議論をしていただいて、こうあるべきだという提言をいただきました。

そこに、先ほどもちょっと出ましたけれども、児童育成計画推進部会からの委員さん、他いろんな方々を含めて提言をいただいて、今の基本的なフロアを作ったわけでございます。

その懇談会で、3月に提言をいただきましたけれども、どういう目的の施設なのかというのが、ちょっと、ここで読まさせていただきますと、「主に家庭で育児をしている世帯の子育て支援のため、親子がいつでも気軽に訪れ、ゆったりとした雰囲気の中で過ごせる空間を提供するとともに、育児に関する相談、子育てを支援する人材育成、親子と子育て関連機関・団体・地域とのコーディネートを行うことにより、子育て支援のための各種事業を一体的に実施するための態勢を整備することにより、地域の福祉力、特に地域の子育て力を向上させ、子育てしやすい暮らしづくりを推進し、子育て世帯が地域において安心して子育てできるようにすることを目的とする」という、非常に盛りだくさんの目的を提言していただきました。ある意味では、すべてというか、これを含めて、今、運営をしていただいてると思っています。

行政側からの成果ととらえるのは、1点は、この保健所の購入から2階のフロアの利用を通じて大学とN

P O、それから、市民参加、これは、協議会、先ほどの児童福祉の、児童計画の推進協議会も含めての参加で、オープンな議論も、その後の運営に大きく影響を与えたものだと考えています。

それから、2点目には、後ほど見学会もありますけれども、やはり、思い切りのよい施設で、多くの方々に利用されているということだと思います。これは、オープンスペースが非常に大きくて、これについては素晴らしいという評価でありますし、さらに、先ほど汐見先生のお話からもありましたけど、この接遇については非常に気を配っていただいて、来館者の方が、皆さま、本当に喜んでいらつしやると思っております。

それから、白梅大学の各先生方をはじめ、学生さんも含めたいろんな知識を、この事業の中で反映していただいているということ、それから、N P Oの皆さんのご活躍も、当然、ございます。さらには、ボランティアあるいは人材の育成についても、先ほどご報告があったように、いろんな面で活躍をいただいていると感じております。

東村山市と大学との連携というのは、これまで、個々には、例えば研修をやるとかはありましたけれども、これだけ、事業を含めて連携をしてきたということは初めてでございます、非常にいい経験をさせていただいているなと思っております。

先ほど、山路先生からありましたけれども、どうか、いつも聞かされるんですが、こういう施設は、東村山の「ころころの森」、それから、「たまつこ」、多摩地域ではこの二つぐらいなんですね、今、こういう大きなスペースがあるのは。おかげさまで、というか、市外からの利用が非常に多くて、3割近くは市外の方が利用されているというのも現状です。

なぜ広がらないのかというのが、この辺、なかなか難しいとは思いますが、先ほども、ちょっと、私も触れましたけど、やはり、待機児というのが非常に大きく、マスコミでも注目されて、行政も、保育園の待機児を解消するのは大きな命題でもありまして、どうしても、そういうところには力が回らないというのが、率直なところかなと、私は思っていますね。

たまたま、この「ころころの森」に東村山が取り組めたのは、先ほども言いましたけど、保健所を7割引きで購入できたこと、それから、ちょうどタイミングよく社会福祉協議会の事務所の移転が併せてできたことと、これまでの、東村山の児童福祉の市民のご意見をいただく場として、この間N P Oさんとの関係もできていたという、うまくタイミングが合ったからかなと思っております。

私の時間も、もう、ありませんので、この辺で終わりにしたいと思いますけれども、課題として、いろいろ、

これまでもお話が出ました。市としては、お金を有効に使わなければならない。実際、今、3500万円ぐらいで白梅さんにはお願いをしていましたけれども、このうち、実際に市が持ち出すお金というのと、国や東京都から来るお金というのもありまして、率直なところ、国と都が2000万ぐらい、市が1500万ぐらいのお金を出しております。ですから、これを、取りあえず、当面、同じようなかたちで確保していくために、いろいろ、市としても悩みがあります。財源確保というのは、非常に大きい課題です。

次に、今まで白梅さんに委託というかたちでお願いをしていましたけれども、4月からは、東村山市子どもNPOユニットという方々です。今も運営にかかわっている方もいらつしやるわけですが、今度は、NPOの方々に、指定管理者制度という制度でお願いをするということになります。

と同時に、今の「ころころの森」に、ファミリー・サポート・センターという事業を、4月から、一緒に含めて運営をしていただくようになりますので、ちょっと事業が膨らみます。市としては、指定管理者制度になれば小回りが利く、あるいは、事業者の創意が生かしくなるというのも狙って、今回、指定管理者制度というかたちにさせていただきました。

いくつか課題もあります。時間の関係上、全てをお

話しすることはできませんが、市役所からの報告ということにさせていただきたいと思います。ありがとうございます。

山路 今井部長、ありがとうございます。それでは、「ころころの森」の運営の一方の運営主体としてもかわっていただいた「NPOすずめ」の千葉さんに三者協働という役割ということで、お話をいただきたい。

千葉 「東村山市子育て支援ネットワークすずめ」の副理事をしております千葉と申します。よろしくお願います。

汐見先生のお話でも、それから、今井部長のお話でも、三者協働のことがいわれ、実際のところはどのようなところなんだと思いますね。1から10まで全部お話しすることはできないんですけども、よかったところと、課題と、それぞれあると思います。4月からは実際に私たちが運営主体になるわけで、そういうものも含めて、簡単にお話しさせていただければと思います。

ももとの私たちNPOとのかかわりは保健所の2階をどうしようかという懇談会に、市内の子育てをやっているNPOとして3団体に声が掛かって、委員としてそこに参加したのがきっかけでした。

待機児が多い中で、保育園を造れと言われている中で、よく、こういう施設を、東村山市は思い切ってやることにしたなというのが率直な感想でして、その懇談会の中には、実際に子育てをしている現役のお母さんも入って、どんなふうに使いたいかとか、ベビーカー置き場が要るよねとか、お弁当を食べるところは高いテーブルじゃなくて低いほうがいいよねとか、ほんとにいろんな意見を、その中で入れられるような会議をしていただいたと思っています。それが生きて、今の「こころの森」のかたちになっています。

その関係で準備会に子育てのNPOがかかわってくださいということで、事業計画にまで一緒にかわるようになりました。事業計画も一緒にして、こんなことをやったらいいよねという話をして、あとは、運営委員会とかで、いいかなと思っていたんですけど、なかなかそうはいかず、先ほどの役割分担的にも、一歩踏み込んだ運営にかかわらざるを得なくなっていました。

最初は、こんなにやるとは、実は思っていなくて、形態としては、白梅学園の委託ですので、現場の職員は白梅学園大学の職員になるんですね。現場は現場で、そうやって動いていて、運営委員会というのがあって、そこに市の代表と、NPOと、それから、白梅学園大学のほうから事務局や教師の方々が来て、予算とか、事業計画というのはそこで決めて、そこが決定権を持

つというのが大きなシステムとしてあって、それが年に3回、おしまいに運営委員会がある。

その後に協議会ができたんですけど、そろそろやつと動いていって、現場は、事務局がいて、職員の、常勤職員じゃなくて、その中で具体的な日々のことは決めていくというかたちで動いていたんですね。ただ、現場を動かすのって大変なんです。毎日毎日たくさんのお母さんが来て、日々、そのお母さんにどういことを教えるのかというのは大変なんです。

市の施設なので、規約とか、そういうのは全部市のものを使わなくちゃいけないんですね。セキュリティだとか、個人情報だとか、そういうのは市の規則を守らなくちゃいけないくて、当初は市の職員もいましたから、それは決まっていなかったからだと、それは上を通さないとだめとか、横でいろいろ言われながら、現場は動かなくちゃいけなかった。

白梅学園大学は小平市にありますから、事務局は遠いんですね。

市と現場を調整する、白梅と現場を調整する、あと、市と白梅を調整するという、調整役がなかなかなくて、現場がすごく動きにくくなっている状況になっていて、そのところを、結局、NPOがやるしかない。事務局会にNPOの代表3人がかわるようになって、主に、私は、自分の法人のほうでも会計を担当してい

るので、どちらかという会計、ホームページや広報誌などを得意としている人がいて、役割分担が仕事の中でもありながらも、マネジメントをやってきたというのが実際のところですよ。

私たちは、白梅学園大学と協定書を結んで、実際には、NPO法人として利用者調査を請け負ったり、それから、紙芝居やお話を皆さんにする事業をそこで行ったりして、それは、協定書の中の、手数料1時間当たりいくらずよという規約がありまして、それで、手数料として、かわった分だけのお金を白梅学園から振り込んでいただくというかたちで成り立っていました。

だから、全く無償でやっていたわけではなく、事業に関しては、実際にやった時間、30分で2000円です。いろんなものを全部含んで2000円、何人来ても2000円ですけれど。あと、コーディネート料として、いろんな調整役、マネジメントをしたりとか、いろんな仕事をするということで、1カ月当たり3万円、それぞれのNPOで全額にしてみれば50万円ぐらいの手数料が、白梅学園から振り込まれていたと思います。

それは、NPOとしては、とても、本部の収入としては助かって、人も動いていることなのでそれだけの支出があるんですけども、ちゃんと、持ち出しばかりじゃないのよというところは保証されていたと思います。

課題を二つだけ話したいと思います。1点目が「ころころの森」の事業をバックアップしたり、あそこで目指すものを支えるのが、やっぱり、私たちの役目だったと思うんですね。でも、あそこ場所で、自分たちのやりたいことを押し出してしまつて、自分たちのNPOの色を強く強く押し出してしまつと、うまくいかないということですね。

もう1点は、三者協働です。市からも縛りを受けるし、白梅学園のやり方もあるし、真ん中で挟まれてすごく大変な思いをしているのは現場なんですね。

東村山はまだ畑がたくさんあって、新鮮な野菜をいっぱい作っていて、無人の野菜販売所もたくさんあるから、それを「ころころ」の中に持つてきてやりたいんですけれど、でも、一定の人の利益になることってできないです。市の施設ですから、やっぱりできない、だめですと言われてしまった。

お茶会をするんですけど、土曜日に、お茶会っていうのかな、コーヒーと、市内で販売しているいろんなお店屋さんのお菓子をセットにして、ちょっとほつとした時間とというのがあって、そのお菓子を仕入れるのも、小さい地元の業者さんなんだけれども、市のやり方でいろんなものを出していただいて、掛け売りはだめで、後で早くお金を払わなくちゃいけないとか、そういうシステムの中でやらなくちゃいけない。「こ

れ、おいしいよね。これを、ぜひあそこで出したいよね」と思っても、「そういう手間の掛かることは嫌です」と言われちゃってできなかったりということもあったりして、先ほどあった、指定者管理になると、そこら辺が、だいたい、こちらの自由にできるかなというところがあります。

ただ、実際に今やっている二つのNPOが、東村山市子どもユニットという事業体を作って、4月から運営をするんですけども、そういう身になって初めて分かるかなというところは、比較的自由に、好きにやらせていただいたほうじゃないかなと今、実感として持っているところです。お金の部分もそうですし、運営の部分も、散々ギャーギャーわがままをこちら側が言っても、市のほうとしても、例えば白梅のほうとしても、そこは、なかなか本来は厳しいんだけどなということと、ろを、随分、枠を広げていただく中でやってきたんじゃないかなと思っています。

白梅の会計も、大学の学校法人の基準は大変と実は思っていました。こちら側が実際にやろうと思うと、いっぱい、いろんな、本当は波があつて、そういう波の防波堤に、やっぱり、白梅がなつてくれていた。自分たちが引き受けることになって、ここで初めていろいろ分かるかながあるんですね。だから、実はうまくいっていたのかなと思っているのが、今の私の感想になります。

す。

いっぱい課題をいただいたと思っていますので、この4月からは、ちょっと変わるけども、基本的には三者協働というのは変わらないかなと思っていて、役どころも微妙に変わるけども、協力してやっていくという点では、白梅とも、それから、市とも、一緒に、また、よりよい「ころころの森」を造るために協力し合っていきたいなと思っています。

山路 率直な内輪話まで聞かせていただいて、ありがとうございました。いろいろな不自由なことはあったけれどという話ですね。岡先生、多摩市と大妻女子大ということ、その意味では二者協働ということになりますけども、「たまっこ」で、「ころころの森」と同様、多摩の26市の中では、非常に数少ない子育て総合支援施設の運営責任をやつてこられた立場から、「たまっこ」のご紹介と課題をご説明いただきます。よろしくお願ひいたします。

岡 あらためまして、大妻女子大学の岡です。いくつか、今、山路先生が話されましたが、ちょっと誤解があるので、三者協働です。追って説明しますけれども、ただ、三者協働というかたちは、東村山とは若干異なると思っています。それから、私の立場は、最初のと

ころで言っていたいただきましたが、アドバイザーというポジションにあります。ただ、今、山路先生が話された「内輪話」の件ですが、私は、大学も東村山市も相当頑張られましたねと、伺っていてむしろ思っておりました。

さて、多摩市の施設についてですが、この施設が生まれた経緯は、当然「ころころの森」とは異なります。多摩市の子育て総合センターは、もともととは多摩市の公立幼稚園の跡地でした。多摩市（特にニュータウン）では、皆さんもご存知かと思いますが、高齢化がどんどん進行しています。その中で、いくつもの幼稚園が閉園していくという状況がありました。そうした状況下で、公立幼稚園をそのまま設置し続けることが、果たして、さまざまな観点から適正なのか、という議論が出てきました。

もちろん幼稚園の閉園にあたっては、様々な問題があったと聞いています。ただ、では幼稚園を閉じたとして、今度はその跡地をどう利用するのか、ということがさらに議論として出てきました。先程お話に出た、旧の保健所跡地をどう利用するか、というのと同じだと思います。そして懇談会が作られました。

懇談会は、「多摩市子育て総合施設市民検討懇談会」という名称でしたが、そこで提言として出されたものが、

A 機能…市全体をネットワークする中核施設とし

て、研修・研究機能を中心に、市内の保育園・幼稚園・小学校をバックアップする機能。

B 機能…保育実践の場と、在宅育児家庭に対する支援のネットワークを図る機能

の2つでした。

そして、新しく構想する施設は、この「A・B機能」の両方をもつ施設に、と懇談会は提言しました。

もちろん、さまざまな議論がありました。例えば、多摩市は、東村山と同様に待機児童が決して少なくはない。ニュータウンは高齢化しているのですが、一方で駅前とか、再開発の地域にはどんどんマンションが建っていくので、子どもの数は、局所的には増えている、という実態もあります。待機児童も結構いるため、保育所を新設すれば、という話もありました。ただ、跡地の規模で考えると、総定員で70人ぐらいの保育所しか造れない。70人定員の保育所を造ることが、今、最優先に必要なことなのか、という議論がその懇談会の中で話され、結果この2機能をそなえた施設を、というかたちになりました。

この提言を受け、今度は庁内で改めて基本方針が策定されました。そのときに出されたものがこれです。実は、三者協働ですと言ったのは、その施設には5機能担うことが示されているのですが、一つ目は、広

場機能ですね。これが、先ほど言った「B機能」の中での在宅育児の支援にあたる部分です。

それから、2つ目が「B機能」の中での具体的な保育機能としての、一時保育機能。ちなみに、「ころころの森」と多摩市の施設が一番異なっている点は、この一時保育をやっているところにあるのだとも思っています。どういう一時保育かというと、リフレッシュに軸足を置いた一時保育です。だから、リフレッシュ一時保育機能と呼ばれています。利用者は、月に4日までしか使えないことになっています。

私は多摩市がリフレッシュ目的を前面に出した点について、非常に英断だと思っています。というのも、保育所等でやっている一時保育が、往々にしてパート就労の方たちで埋まってしまうという現状が少なくはありません。なので、本当にリフレッシュが必要なお母さんたちが、ふっと利用できるような場所がやっぱり必要だろうという認識から、この一時保育が想定されていたからです。

続いて3つ目。人材育成研修ネットワーク機能。いわゆるシンクタンクであったり、研修であったりを担う機能が挙げられています（これがA機能になります）。そして4つ目。ファミリー・サポート・センター機能があります。先程、東村山市も今度の指定管理からファミサポの機能もその中に一緒にと話されています。

したが、多摩市の施設では最初からファミサポが入っていました。担い手は、「たすけあいの会 ぼれぼれ」というNPO法人です。とても力のある素敵なNPOさんですけれども、そこがこの施設の開所前から既に市から受託され活動していたのを、設置を機にそこへ入ってもらう、という話が最初からありました。

最後に5つ目として多摩市の直営の子ども家庭支援センター。いわゆる子家センと言われる総合相談機能もそこに入ってくる。なので、大学、NPO法人、多摩市による三者協働となります。

ちなみに、的はずれかもしれませんが、「ころころの森」さんの場合には、比較的、「ころころの森」ということの運営に特化していらつしやるように私には映っています。市は本庁にいて、ファミサポも外に出ている。それに対して、3つが同じ建物の中にみんないるというパターンがうちの施設だと思っています。

次に私たちの学校がこの3機能（ひろば機能、リフレッシュ一時保育機能、人材育成・研修・ネットワーク機能）を担うことになった経緯についても触れておきます。

契約の形態については東村山市さんと同様に、随契なんです。多摩市サイドはどのような手続きを踏まれたかという、まず多摩市はネットワークの中で、近隣の各大学と包括協定を結んでいました。なので各

大学に、多摩市の方から、実は、今度設置する子育て総合センターの5機能のうち3機能を大学にお願いしたいと思っているが、どのような協力の可能性があると考えているのか、という点についてアンケートが実施されました。

ちなみにこの時、大学に絞ってアンケートを実施した背景には、実は、研修という機能の実施をどう考えるか、という問題があったようです。というのも研修の対象は、例えば子育て支援者さんであったり、幼稚園の先生、あるいは保育士さんといった専門家が対象になります。この場合、例えば特定の保育園を運営している社会福祉法人さんや、特定の幼稚園を運営している学校法人さんが手を挙げて、他の法人の保育者（保育の専門家）が、こういう保育が、こういう専門性が、という話はしにくいだろうということが危惧されたようです。要はざっくりばらんに言ってしまうえば、なんでお宅の法人の研修を、私たちが受けなきゃいけないんだ、というようなことが起こってしまうことを危惧したんだと思います。その点、ある種、専門性の代表としての大学というのは一番自然ですし、実際、そうした研修等を担われている先生方も多い。だから大学に、ということだったのだと想像しています。

アンケートの結果、大学によっては、3機能中これだけはやるよとか、このことはやるよとかいう返し

方が多かったようです。その中で、たまたま三つとも関連付けながらやるよと回答したことで、私たちの大学がそれを受けていくことになったというのが経過です。

実際には、平成20年に、「多摩市と大妻女子大学の子育て支援にかかわる連携に関する細目協定」が交わされ、平成21年の11月からこのセンターが開所されることになりました。

今、多摩市立子育て総合センターには「たまっこ」という愛称が付いていますが、これは開所後に、広く市民の人たちに公募して、利用者の人たちも含めて投票して決まった名前です。あまりにオーソドックスな名前なので、みんな、「うーん、これでいいんだろうか」と思いながらも、「悪くもないよな」と言いながら、「たまっこ」という名前が付いた経緯があります。

リフレッシュ一時保育に関しては、その後、ちよつと遅れるかたちで始まって、現在に至っているということになります。

さて、先程の汐見先生のお話を受けて、実際、私たちがやっている中での役割は、どんなところにあるのかな、と考えていたのですが、先ほどの3機能の中で言うと、特化した役割というのでは、一時預かりをやっていることは大きいだろうな、と思っています。ただ、そのことに対する社会的な発信というのはまだまだ

だできていないかなとも思っているのですが…。

先ほど、最初に出ていましたが、一時預かりは今後の新システムの中で、市区町村事業の中に入ってきます。でも一時預かりは、保育所のような整備が必要なので、例えば、給食施設だとか、給湯施設だとかいうのが、乳児を預かるときに必置とされない。ただ、例えば3・11の震災のときに、私は、実はあの日センターの現場にいたんですが、たまたま帰宅困難者はいなかったんですが、8時間の受け入れをやっているの、今度また震災が起こった際に、帰宅困難者が出る可能性が非常に高いんですね。でも、帰宅困難者が出て幼稚園施設の跡地なので給湯施設も給食施設も付いていない。そうした状況を想定したとき、果たして子どもたちをずっと預かれるのか、と。しかも、うちの一時保育では、市内の保育所を含め、唯一3カ月から子どもを預かっている施設です。なので、3カ月から子どもを預かっていて、何かあったときに子どもをどうするんだ、という話が今も喫緊の課題として挙がっています。

加えて言えば、うちの施設にとつての第一避難所は近くの小学校となっています。ただ、小学校の体育館に3カ月の子どもを連れていけるのか、連れて行つていいのか、という話しになる訳です。乳児が暮らせる施設を整えなきゃならない。給食施設は造れないけれ

ど、せめて給湯施設は何とか造れないか、という話になるのですが、その時の壁になるのが、後から施設整備ができるのか、という問題になるわけです。施設整備は行政がすること。でも、行政的には一旦整備が終わっているものに追加整備することは非常にハードルが高い。しかも財政的にも余裕がない。

部長笑っていらっしゃいますけれど、いろいろなところを乗り越え、何とか取りあえず、給湯設備は付けて、現在は6時間開所となっているものを、何とか8時間開所に戻そうとしているわけです。

ちなみに6時間まで戻した背景には、6時間だったらまだ帰ってくるよねって、8時間だとほんとに遠いところまで行ってしまうので、帰ってこれないよねっていうことが想定できたので、そういうふうに取り敢えずしているんですね。でも一方では、受委託の仕様書に書いている事業をやらないと、契約違反だよみたいな話もある訳です。

なぜこんな話を今しているのか。それは、例えば、NPOさんがたくさん今日もいらっしゃっていると思いますが、一時預かりつて、NPOさんが非常に引き受けてきていて、そのときの施設整備の最低基準ってどうなっていますかって言ったら、先程も申しあげたように取りあえず、法的には要らないんですよ、何にも。でもわれわれのような専門性を請われて事業を引き受

けた立場として、一時預かりをやっている立場として、こういうことって、市区町村事業の中で落ちてきますよ、新システムになったら間違いなくって、警鐘を鳴らす必要があるのだと思います。想定されるリスクに対してこんな備えをとか、こういう約束をとか、こういうことの必要性をとかいうことを、むしろ、そこから提言していくことは、多分に必要なこととしてあるんだろうなと。

それからもう一つ。保育者と支援者の専門性の違いは、非常にあるな、とわれわれも思っています。私たちのところでは、専任のスタッフは全員が保育士の資格を持っています。もちろん資格を持っていれば、それで事足りるのかといえ、それは全然別の話なんです、取りあえず資格を、いろんな理由から持っていないでいます。

その中で、現場の実践の中で繰り返し支援者の専門性の問題にして話題に取り上げているのは、先程汐見先生が距離感というような話を話されましたけど、具体的に言えば、ルールであることと、それを破ることというのを、どうやって両立していくのかという点です。私は保育者・支援者の専門性において、そこで重なるものもあると思っていますし、また違うものとしてもあると思っていますが、本当に日々、喧々諤々議論し合っているというのが現状で、そういうこと（子

育て支援者の専門性とは何か）についても、もっともと、本当はオープンにしていくことの責任が、大学の観点という意味ではあるんだろうなと思っています。

あと、私たちの一時預かりでは他にも色々スタッフを取り組んできています。例えば、一時保育の難しさというのは、連続した子どもではない。その点についても先ほど話が出ていましたが、たくさんの子どもたちが来る中で、でも、ケースとして捕捉しなきゃいけない人を、どうするのか。私たちの施設は、先程お話ししたように、子ども家庭支援センターが併設されていますので、気になるお子さんに関しての継続的な記録というのは、全部、ファイリングシステムとして取っているんです。一時に来る子どもたちも、もちろんカルテを持っています。

カルテを持っているってどういうことかというと、今日、初めて来たねではなくて、2回目以降、「よく来たね」「この間、こんなふうにして遊んでいたよね」ということも含めて、その子どもができるだけスムーズに受け入れられるようにという仕組み、システムというのを、具現化したものに他なりません。

他にも連携という課題は山積しています。例えば、これもいいことかどうか分かりませんが、ハイリスクなケースであるほど、家事援助も含めてサポートが必要になることは想像に難しくないと思います。そのサ

ポートを、市の側は、現実的には、お願いするときに、ファミサポさんをお願いをする。ファミサポさんは、本来は互助システムとしてあるのに、実は、担っているケースは結構ハイリスクだったりすることが起こっていることも実際少なくありません。また、そういう親子が広場に遊びに来る、広場に来たときに、じゃあ、その広場の中で、われわれがその親子の動きを見ているのを、上とつなげることを、実際にはやろうと取り組んでいます。

それぞれに、それぞれの立場があるので、まだまだいろんな意味でのぶつかり合いも含めながらやっているというのが現状だと思います。早く終わると言ったのに、長くなってしまうしました。以上、現状と、一部課題という感じになります。

山路 はい、ありがとうございます。今の岡先生の話聞いて、成り立ち、機能、特に一時預かりについては、「ころころの森」と大きな違いがあります。ただし、共通する部分も、基本的には相当あるということも分かりました。

今、シンポジストの方々から出された意見を受けて、いくつかの点について、あらためて議論をさせていただきます。まず、最初に、今井部長のほうからもご報告がありましたように、東村山市は非常に財政状況が厳

しい。渡部（尚）市長に言わせれば、多摩26市の中で最も厳しい。その市が、なぜ、年間運営予算3000万円以上を支出する施設を作ることができたのか。多摩市も、もちろん、待機児童が多いというお話がありましたけども、それでもなお、作るといふ決断をされた。ただ、総括的な話をしますと、さまざまな課題があるにしても、コストパフォーマンスとしては非常にいいのではないか。補助金を差し引けば1500万円しか、結局東村山市は出していない。

最初、東村山市から話が持ち込まれたときに、市幹部らの思いは、保育園に行けない、行かない親御さんたちは、大体5人に4人いると。5人に1人の保育園に行っている親子に対しては膨大な予算が、税金が過ぎ込まれ、1人当たり200万円以上のお金がつぎ込まれている。この周辺で保育園を一つ建てようと思っただけで約10億円かかる。

一方で、子育て総合支援施設の予算が、東村山の持ち出し分が1500万円、保育園に行けない、行かないお母さんたち、子どもたちは、今まで一銭の税金の恩恵も受けていなかったのに、今回、こういううちでできたことによって、非常に喜ばれている。

それが他市でなぜできないのか、むしろ、ほかの市に伺いたい。今回のシンポジウムに、他市の方々に、NPOの方々に呼び掛けたのは、実は、そういうところ

もあった。もう少し、こういうデパート型の総合支援施設の役割は、明確にあるんじゃないか。われわれの、「ころころの森」をやってきた一つの経験、実践から得た一つの成果ではないか。

その点について、子育て総合支援施設が、なぜ、多摩市、この東村山市以外のほかの市に広がらないのか、待機児童対策が非常に大変なことは分かるけれども、もう少し幅広い子育て支援に広えていくような取り組みも、必要ではないかと。その点について、ご意見、コメントをいただきたい。

汐見 今、山路先生のほうからお話がありましたけども、大きな歴史的な流れの中で現在の局面を見てみると、間違いなく、新しい動きが始まっていることは事実なんです。もともと保育所というところは、親が働かざるを得ない、あるいは、病気でその子どもたちの面倒を見られないという場合に、国あるいは自治体が、何とかしてほしいと訴えがあった場合には、その子を保育しなければならぬという「児童福祉法第24条」の規定があつて、これは、戦後にできた画期的な法律なんです。それで、とにかく、特別のニーズがある家庭に対しては、面倒を見ましょうということで進んできたんです。

ということ、裏を返せば、保育に欠けない子どもについては面倒を見ませんよということが、ずっと続い

てきたわけです。「保育に欠ける」という文言が入ったのは1951年でした。最初の児童福祉法には入っていませんでした。それで、幼稚園に、本来、来る子が、全部保育所に行ってしまうので、幼稚園側から、ちゃんと区別してほしいという要請があつて、それで、何を区別の基準にするかということで、「保育に欠ける」ということが入ったわけです。

その後、保育に欠ける子どものための施設として発展してきましたが、実際には、0、1歳の乳児で、保育園、保育所を利用しているのは、大体2割弱ですよね。ということは、8割近い0、1、2歳を育てている家庭では、ここへ行けば専門家がいて、子どもの育児についてサポートがもらえたり、アドバイスをもらえるところ、実はなかったんです、これまで。

それで、エンゼルプラン以来、家庭で育てているお母さんは働いていないかもしれないけども、いろんな意味で税金を払っているし、その夫は税金を払っているわけですから、納税者であるにもかかわらず、8割の子育て家庭に対しては、特別な社会的なサポートがない。これは、どう考えても不公平ではないかというのが、現在の局面なんです。

ですから、そのために、最初に始まったのが広場事業、拠点事業ですね。現在も、それは、これから発展していきますが、流れで見たら、0、1、2歳を中心に、家庭

で子どもを育てているお母さんたちが、ここに来ればさまざまなサポートがもらえ、そこでいろんな事業が行われて、それも利用できるという、そういう施設を、保育所の数ほどとは言わないけれども、いろんな地域にたくさん造っていくという方向は、最も合理的なんですね。

理屈で考えたら合理的なものは、たぶん、広まってくっていくふうにならざるを得ない。ただ、さっきも言ったみたいに、いろんな都合、特に高齢者対策をやらなきゃいけないので、お金が増えない中で、やらなきゃいけないことがどんどん増えていくという中で、優先順位というものがやっぱりあって、何とか0〜2歳を切り抜けてくれば、3歳から幼稚園に行けるんだからというようなかたちで、優先順位はかなり低いというのが実態ではないか。

従って、待機児問題を解決しようということとつなげて、首長が、この問題にもっと力を入れないと、子育てしやすい何々市とは言えないんじゃないかと本気で思った自治体だけが、そういうのに一歩出ているというのが、今の実情じゃないかと思うんです。

つまり、潜在的には、すべての自治体がこういう施設をどんどん造っていかなければ、歴史の流れからは取り残されていく局面です。ただ、財政上その他の理由で、優先順位がかなり低くなってしまっているとい

うのが実態で、従って、逆に言うと、住民が、どこどこにあるのに、何でうちの自治体にはないんだということを書いていけば、これからは、やっぱり、造っていかざるを得ない。

そういう意味で、かなり東村山市は、普遍性のあるモデルになってきていると、私は思っています。優先順位の低さというのがまだ残っているのですが、実際は、これからどんどん造らざるを得ない組織ではないかと思うということです。

山路 隣の所沢市の方々は、1年ほど前、見学に部長以下、来られまして、体育館の建て直しに伴って、「このころの森」のような総合支援施設を造りたいと、建設する方向に向かって、今、進んでいるそうです。汐見先生が言われたように、自治体によってはそういう動きが出てきているというのは、その意味で、非常に心強い話です。

今井 先ほども言ったんですが、そのためにだけ施設を造る、あるいは土地を確保するというのは、率直に言って、なかなか難しい。うちの場合は、たまたま保健所の生かし方について議論があったときにそういうお話が出たものですので、たぶん、新たに造るといいうのはなかなか、申し訳ないんですが、うちの事情は厳しいと思います。さっき、国立市の話もありましたけど、国立市より、はるかに、うちの方が財政は厳しい。

岡 結果的に言くと、多摩市も幼稚園の跡地利用なので、新規にその施設を造るかというのと、難しいと思っていますし、実は、委託料3500万円というのは、うちよりも高いです。私たちはひろば事業だけでなく3事業やっているんですけどみたいな話で言えば、かなり厳しい状況の中で、うちはやっています。しかも、多摩市は、当時は不交付団体だったのでお金があると言われていたのが、今や緊急の財政の立て直しに取り組まざるを得ない。予算削減をめざし、すべての事業が、いわゆる0ベースで見直しとなっています。おそらくうちの委託費も削られます。

だから、そうなっていたときに、すごく難しいと思うのは、何で広がらないのかということではおそらく、汐見先生がおっしゃったように、絶対に必要なものではあるんですが、既にある法律の枠組みが足かせになっている場合が少なくないという点です。例えば、委託料の範囲内で自分たちで独自にいろんなことに取り組んで、生産性を向上しているかと思っても、概算払いによる委託契約だと、予定されたこと以外に金を使うなどという話になってしまつて非常に難しい状況に陥ります。おそらく今回「ころころの森」が指定管理者制度に移行していくという話もこうした点と関連しているのだと思います。

しかも、大学と行政の連携について言えば、例えば

調査の委託といったようなものは非常に多いのですが、施設の管理運営の委託というのは非常に少ないと思います。というのも、白梅の先生方もそうだと思いますけれども、施設運営にかかわられている方たちの人件費は委託費からは出ないですよ、当然のこと。でも、実際にその仕事に責任をもつて専念しようとするれば、本務に差し障るわけです。大学としては、人をその事業に充てれば、その分の補充を学内でしなければならぬ。それも自腹で。

さらに白梅さんがどうなのか知りたいんですが、文科省から、うちが事業を始める時に明確に収益事業と位置付けられています。でも、委託で収益なんか上がるわけがないですよ。委託料は残ったら返すんです。だから、収益と言われながら、収益を上げるすべが、実はない。なぜこうした枠組みになっているのか。それは、先程の3機能のうち、人材育成を事業として担っているからなんです。一時預かりと広場であれば、これは第二種社会福祉事業なので問題ありません。でも人材養成を持っていることによって、これは収益事業だと、文科省は言うわけです。

もちろん好意的に解釈すれば、現行の枠組みで言うところ、つまり、大学のお金も、大学なんだからもつと地域の中に還元してと言われてもできないことは理解できます。なぜならば、大学のお金は学生の納付金であれ、

私学助成金であれ、それは大学の教育と研究に使われるべきものであって、学外施設の運営に使うものではないわけです。目的外利用に他ならないと。しかも地域貢献についてだって、私学における地域貢献とは何か。こころ辺も、たぶん、議論がたくさんあるのだと思います。こうした点からも、大学が非常に乗りにくい仕組みになっているという現実があるのだと思います。

市のほうの仕組みについても、これは分かりますけれども、ということとで……。例えば協働協定が未だに整備できていない状況などはわかりやすい一例)

だから、結局、広げられない理由は、そうした、既存の、持っている制度とか、法とか、仕組みとかが、そういうものに対応するようにできていなくて、それを破ることはルール、法を破っていくことになるのでできないことなんだと思っています。

山路 よく分かりました。

汐見 「こころ」や「たまっこ」のような、大学と市民と行政の協働でというスタイルというのは、いろいろ、実際には制約が多くて、これが唯一のモデルになって進んでいくというふうには、あんまり思わない。そうじゃなくて、一つのモデルというのを私たちは切り開いてきていると思うんですが、在宅で育児をしている、小さな子どもを育てている家庭への支援のため

の施設というものが、やっぱり必要で、それが、非常に効果が大きい。そういう実績というものを作っていくことによって、こういうものが必要だという社会的な基準というものを作るということは、間違いなく作れてきているし、それが社会的に認知されていくということとは、間違いなく進んでいるだろうということですね。

これは、別に楽観視しているわけじゃないんですけども、長い歴史の中で見たら、子育て支援なんていう言葉が出てきてまだ15年なんですよね。それでいてここまで来ているわけですよ。それは、そこをやらなきゃ、社会そのものが維持できない、子どもがちゃんと育てられなかったら、実の親がちゃんと育てられなかったら、この社会は維持できないんですから、そういうことについて、洪々であったとしても、そうなんだなということを認めざるを得ないということが社会の動きですよ。

それで、そのためには独自の施設を造ることが、やっぱり必要なんだということ、少しモデルが出てきている。実際には、そのためにということとは偶然に発生したんだけど、偶然に発生したところがいいことをやってきたことは、一つのモデルになるですよ。ですから、僕は、それほど悲観的には思いません。

ただ、高齢者もどんどん増えてきますよね。そのた

めに対応を、これから、高齢者の場合はニーズがあれば、それに対して予算を、どんどんお金を使っていけないといけない仕組みになっていますから、それをやらなきゃいけない。そこに、小さな子どものためのサポートをしなきゃいけないということを、今度は、ばらばらに問題にするんじゃないかと、それらを一体にしたような問題の立て方というのは必ず始まってきますよね。

既に富山の、「この指とまれ方式」のような、小さな子ども、誰もが利用できるデイケアセンターというのがあるわけですよ。高齢者も、障害者も、赤ちゃんも利用できるようなデイケアセンターだとかね。そういうかたちで、次のモデルというのが模索されていくというのが、たぶん、始まるだろうと思うんです。

いずれにしても、そこは、小さな子どもを育てる在宅家庭の子どもたちと親たちが利用できるというのか、そこが、いろんなものを兼ねているという総合施設であって、その総合が、子どもだけじゃなくなっていくという方向に行くんだろうと思うんです。それはそれで、また、いろんな制約はあるだろうけれども、そういうのを、次に目指していくことをやって、モデルを切り開いていかないと、時代は進まない。

一言付け加えておきますと、この事業を受けて白梅がやっています、実は白梅としては一銭の利益にもなっていません。それなのに、はじめの頃、いろんなう

わさが広がって、何で白梅なんか引き受けるんだろう、絶対あれで儲けるつもりに違いないといううわさが伝わってきたんですよ。僕は怒り心頭に発した気持ちでした。何て心ないウワサを広げるんだろうと。

白梅の事務の人たちは大変な奮闘をしていたと思いますが、全部ただ働きです。要するに、こちらへ会議に来るだとか、そのお金をきちつと管理するだとか、それをちゃんと報告するだとかいうことを、全部やってくださったんです。だから、実は、「ころころ」はそういう努力によって支えられたということも、忘れないうで伝えておきたいと思うんですが、それに対して、そういううわさを流すということに対して、東村山の民度が知られてしまうと思うのですね。

そういうふうになっていくことは、やっぱり、まだ、市民の本当のものになっていないというのか。僕は、本当は、この施設が市民力を底上げしていくのにどうつながっていくのか、市民が、自分たちで自分たちの町の子育てを応援していくような、そういう市民力がどう高まっていくのかというところにつなげたかった。だから、本来は、市民たちが運営すべきだと。それに対して手伝いはしますけども、私たちがいつまでも中心になるつもりは全くないということを、ずっと、申し上げ続けたわけです。

だから、ぜひ、市民力をアップしていく一つのモデル

として位置付けていただきたい。

山路 大変申し訳ないことなのですが、時間となりました。

もう少し、三者協働とか、大学にとって、どういうメリットがあったのかということについての検証もまだ必要ですが、そういうことについても議論できませんでした。次号の「地域と子ども学」の中で発信する方針です。もし、必要であれば、白梅に来ていただければ、何らかのかたちで差し上げることはできます。そういうかたちで、論点不足についてはそこで補っていただけだと思います。

それから、付け加えていただくことがあれば、一言ずつどうぞ。

千葉 24年からの指定管理は5年間です。私たちと、それから、そこにいる「HUGこどもパートナーズ」と二つの団体で、「ころころの森」と、それから、ファミリースポート・センターを運営していかなくちゃいけない。今、その準備をいろいろやっているんですけども、今日ここで、たくさんテーマをいただいたなと思っています。

今もとても評価が高い「ころころの森」を、さらに次の高みに上げていくというのはとてもしんどいことで、職員もそうだし、それから、市や白梅の方々とよ

く協力してやっていかななくちゃいけないし、道は遠いなどというのが、私が今感じている思いなんです。それでも、先が見えて、ゴールというのかな、何か、行くべき道を指し示していただくことができたかなとも思っていますので、頑張っていきたいと思っています。よろしく願います。

石井 たくさんさんの応援をもらいながら、「ころころの森」はここまでやってこられました。やっぱり、これは、こちらが市制としてサービスを提供する場所にはしたくないと、ほんとに、利用者さんと共に作っていく場所、これからも、もっともっと利用者さんの声を聞きながら、ルールを含めながらよりよいものにしていくために、ぜひ、ぜひ、また、もっともっと多くの応援をお願いしたいと思っています。よろしく願います。

今井 3年間、ほんとに白梅大学さんにお礼を申し上げます。NPOさんあるいはボランティアさんも含めて、この3年間、本当にお礼を申し上げます。と思います。

行政は、なかなか、そこだけというの厳しいんです。バランスというの求められますので、いろいろ、市役所も苦労して、これからも頑張っていきたいと思えますと最後に言わせていただきまして、お礼を申し上げます。

岡 私は、行政職員でもなんでもないので、ただ、最

後に汐見先生がおっしゃられたことで、私の中でずつと残っているのは、大学がいつまでも中心で残っているべきではない、でも、例えば、それぞれの運営形態と、請け負っている事業の違いがあるでしょうが、例えば、今、私たちは一時預かりという保育に関しての事業を引き受けている中で、じゃあ、どこまでその責任を全うすれば、われわれが仮に手を引くんだとすれば、まず、手を引くってどういう状態なのか、先ほどの千葉さんの話でもそうですが、汐見先生が先ほどおっしゃったように、見えないマンパワーとか、お金とかって、大学からのすごく出ていると捉えざるを得ないのが現実なわけです。本当に沢山のことを大学から支援していただいている。

そうした実感から言えば、ほんとにNPOに委ねられていったときに、そういう部分でのお金であったり、マンパワーであったりということが、ほんとに供給し続けられるのかということは、本気で考えておかなきゃいけないと思います。言いかえれば、われわれが前面には出ずに、離れるという意味がどういう意味を結果的に持つことになるのか、とか、やるという意味がどういう意味なのかというのを、大学にいる当事者としては、考え続けていかなきゃいけないことだと思っておりますし、白梅さんがここで判断されていることの

経過なんかも、また、折があれば、教えていただけるとありがたいかなと思っていました。ありがたいございました。

汐見「ころころの森」というのは、長い歴史の中では、一つの実験だったというような感じがいたします。これをどう発展させていたかどうか、これからの、特にNPOの皆さんの努力にかかっていると思うんですが、残念ながら、子どもの数は、今は待機児が確かに多いんですが、10年たち、15年たつと劇的に減っていくんですよ。今の、子どもを産む国民の思い、間もなく、必然的に減っていく子どもの数。

そうすると、人口減少社会というのが急速に始まるわけです。高齢者は、今、増えていきますけど、高齢者の毎年の死亡者数も増えていって、子どもの生まれる数が減っていくと、どんどん人口が減っていくって、あと20年たつと、毎年100万人ぐらいずつ人口が減っていく社会になっていくことは、はっきり分かっている。

そうなると、町のあちこちに、ここは誰も住んでいないよねというような、菌が抜けたような感じになって、それで、逆に、若い人もあまりいないという、そういう町になることが予想される。それを、何とか、この町って、少しずつおとなしくなっているけど、すごくいい町だよ。何か、みんなが、血が通い合っている感じがするよねというような町に、どう仕立て上げて

いくのかということが非常に大きなテーマになっていきます。

そのときに、子どもが活力になっていきます。子どもを育てるお母さんたちのおしゃべりが、町の活気になっていくわけですね。そのそばに高齢者がたくさんいて、それを見守ったり、支えていくという、その三者の交流みたいなものが、これから、大事なテーマになっていくと思うんです。子育て支援が、高齢者サポートとつながっていく。その場所が、実は、あちこちに空き始めたような家が全部活用されているような、そういうまちづくりのイメージを始めていかなきゃいけない。

とにかく、「ころころ」は一つの実験でしたし、これからも、それは発展させなきゃいけないんだけど、それを、大きなまちづくりだとか、市民度育成だとか、そういうものにつなげていくためには、テーマはたくさんあるんだから、それぞれの自治体で、それぞれの自治体の皆さんが、それぞれの条件に応じて、やっぱり、そのモデルとか、いろいろ開拓していただきたい。東村山に続き、これを拠点にしながら、次なるモデルを作っていくんだと思いますけども、大学としては、そういうことに対して、いろんなかたちで、側面でサポートできることだったらやっていきたいと思います。そうやって、新しいまちづくりが、そのことが、私たち大

学にとっても大きな喜びなんだということも知っておいでいただきたいと思います。どうか、頑張ってくださいと思います。

(了)